2018 年 8 月クルディスタン報告書

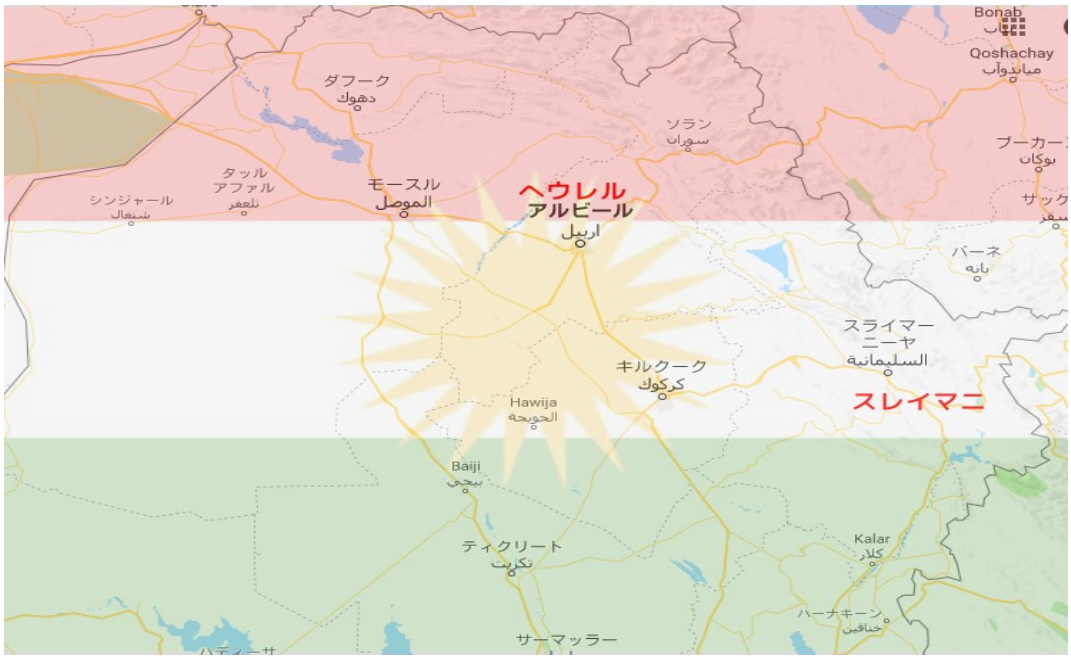
Reporta Kurdistanê Tabaxê 2018’ê

出典：パリ・クルド研究所

一般社団法人　日本クルド友好協会

南クルディスタン（イラク北部クルディスタン地域）

Başurê Kurdistanê



議会選挙を巡る攻防

▸選挙実施日程問題

来月 30 日には、2013 年以来 5 年ぶりとなるクルディスタン地域議会の選挙が行われる。昨年の独立を巡る住民投票の時と異なり諸党派の対立が鮮明になっている。クルディスタン愛国者連盟（PUK[1]）の対テロ部門トップであるラフール・タラバニは 5 日、クルディスタン地域の諸党は、選挙日程の延期を求めていると発言した[6 日、ルダウ]。ラフールによるとクルディスタン地域の諸党は、イラクの新政権樹立を巡る問題が選挙に暗い影を落とすことを懸念しているという。先のイラク総選挙で第一党となったサドル派の報道官は、ルダウテレビのインタビューで新政権樹立にあたりクルド人を蔑ろにすることはないと発言した[9 日、ルダウ]。クルディスタン民主党（KDP[2]）は、現在イラク全体で第 4 党に位置する。これら諸党は KDP が政府内での発言を背景に選挙戦を有利に戦うであろうことを懸念している。このような中 12 日、選挙戦解禁日は 9 月 5 日（日）と発表された[12 日、NRT]。

1 英語名 Patriotic Union of Kurdistan の略称。クルド語では、Yekîtiya(統一) Niştmanîya(民族主義者) Kurdistan を略して YNK。
2 英語名 Kurdistan Democratic Party の略。クルド語では、Partîya(党) Demokrata(民主) Kurdistan を略して PDK。

▸バルザニの資産

サウジの新聞「祖国」は 4 日、イラクの腐敗に関する記事の中でクルディスタン地域前大統領マスード・バルザニの資産について触れた。それによるとバルザニは、スイス、ドイツ他ヨーロッパ各地に有価証券、不動産等の形態で 480 億円相当の資産を保有しているという。その直後、同紙は報道内容誤りについてバルザニへ「深い」謝罪の意を表明した[5 日、ルダウ]。7 日、マスード・バルザニは、在サウジ祖国紙が報じた疑惑を否定した[7 日、NRT]。バルザニの私党である KDP にとって、選挙の直前にこのような疑惑が報じられたことは痛手であったといえる。

キルクーク問題

▸ペシュメルガの帰還

キルクークを占領下におくイラク治安部隊、連邦警察、民兵勢力「人民動員軍」は、地域の治安維持に失敗し IS の復活に貢献し続けてきた。政治的また軍事的にイラク中央政府の勢力からの、キルクーク奪還が困難なクルディスタン地域側は、IS の脅威を喧伝することで捲土重来を狙ってきた。新政権樹立にクルド勢力の協力が必要なことから中央政府としてもキルクーク問題について譲歩する機運がある。アバディ属する党派勝利連合の幹部は 26 日、ペシュメルガの帰還について賛意を示しつつクルド側の新政府への協力が必要であることを示唆した[:26 日、ルダウ]。マハムール[3]方面のペシュメルガ司令官シワン・バルザニは、有志連合軍の調停がペシュメルガの帰還の前提条件になると述べた[8 日、バスニュース]。

ヘウレルとキルクークを繋ぐピルデに中央政府の検問所を設置された[26 日、ルダウ]。

3　モスル作戦に際してペシュメルガの前線基地があった村。PKK のキャンプもある。

表向きの理由はISのテロを防ぐためとのことだが、実際はあからさまな通行妨害に他ならない。治安維持が目的なら、それは既にKDPのペシュメルガや警察によってなされている。キルクークの支配権を完全にクルド側に引き渡す気はなく、できるだけ多くの楔を打ち込んでおきたいという意図が見える。

▸テュルクメンの抵抗

キルクークの治安悪化とイラク総選挙におけるクルド政党の躍進により、キルクーク問題に前進が見られた。キルクークの住民を構成するテュルクメン人の一部が、ペシュメルガの帰還の妨害に躍起になっている。キルクークにおける反クルドキャンペーンについて、職を追われたキルクーク政庁のクルド人が証言した[15日、ルダウ]。そのクルド人職員の後任は、テュルクメン人の職員になるという。イラク中央政府は新政権樹立にむけた混乱を収束させるためクルド側へラブコールを送っているが、裏ではテュルクメンを利用しキルクークの非クルド化を目指していることが分かる。

26日、キルクーク・テュルクメン戦線の副党首は、ペシュメルガの帰還を「憲法違反」だと発言した[26日、ルダウ]。というのもイラク連邦憲法第12条によると、ペシュメルガはクルディスタン地域の自衛部隊であり、地域外での活動は法的根拠がないからとのことである。人民動員軍を構成する民兵団の中にはテュルクメン人主体のものもある。昨年の「キルクーク騒動」は、クルド人とテュルクメン人が住む町トゥズ・フルマトゥで、PUKのペシュメルガとテュルクメン人の人民動員軍部隊の衝突から始まった。キルクークにペシュメルガが帰還したら、自分たちの立場も脅かされると感じているのは想像に難くない。

シェンガル虐殺4周年

▸シェンガルでの行事

3日は、ISがエジーディ(ヤジーディ)の町シェンガルに攻撃を仕掛けた日である。同地では虐殺の犠牲者を追悼し民族の再生を誓う催しが行われた。クルディスタン労働者党(PKK[4])系メディアは、PKKがシェンガルのために行った取り組みとエジーディ共同体の再生に関する記事を投稿した[3日、日報]。シェンガルのエジーディは、ISがシェンガルへ迫った時防衛にあたっていたKDPのペシュメルガが撤退したと信じている。その時避難した住民の多くは、シェンガル山地に逃げ込んだ。そこはPKKの戦闘員が防衛にあたっていた。

4 クルド語名、Partîya(党) Karkerên(労働者たちの) Kurdistanê(クルディスタンの)の略。日本のメディアで散見される「クルド労働者党」の呼称は誤り。

‣クルディスタン地域政府（KRG[5]）の信頼回復なるか

KDP もシェンガルのエジーディの不信ついては承知している。シェンガルは、シリアへと続く街道にある要衝であり、KDP は PKK の勢力からの奪還を狙っている。KRG 首相ネチルワン・バルザニは、エジーディ支援を継続することを約束し、イラク政府にシェンガル復興へ向けて予算を拠出するよう要請した[2 日、ルダウ]。アバディは、シェンガルに 55 ものアラブ人家族を帰還させると発表した[28 日、ルダウ]。この 55 家族というのはあくまで第 1 陣であり、さらに多くの家族のシェンガルへの到来が予想さる。エジーディの民兵司令官は、アラブ人が大挙することに民族問題の発生を懸念する。エジーディの虐殺や奴隷化を実行したのはアラブ人だからである。KRG の対応如何では、エジーディたちに新たな「敗走」の記憶が刻まれることになる。

トルコの侵略行為

‣トルコ軍大本営発表が伝えないこと

トルコ軍は、今月も定期的に対 PKK 作戦の戦果発表を繰り返している。26 日には、9 人の PKK 戦闘員を「無力化」したと発表した[26 日、「自由」紙]。作戦が順調に進んでいるとは言い難い。KDP の支配は、ヘウレルから離れるほど弱まる。トルコ国境付近に近づく程、PKK 支配下の集落が増えていく。トルコ軍の攻撃は、トルコや KDP への怒りを強めることはあれども、PKK から民心の離反を促すことはない。むしろ PKK が主張する「侵略者からの防衛」により説得力を与えるだけである。KDP はトルコを利用して PKK を壊滅しようとするのではなく、PKK、トルコに中立的な立場から調停をする必要がある。

‣PKK 司令官の暗殺

シェンガルの PKK 勢力圏で 15 日、現地の PKK 司令官、通称ザキ・シェンガルがトルコ軍の空爆で暗殺された[15 日、ルダウ]。車で移動中のところをトルコ軍機に狙われた。アバディが、エルドアンとの会談時に PKK に関する情報を提供すると口約束したとのことである[16 日、バスニュース]。KDP はこれを PKK に対するイラク中央政府の裏切りと分析している。トルコ軍の作戦実施時間に合わせて、イラク軍のヘリコプターがシェンガル山地を飛行していたことが判明した[16 日、バスニュース]。

5　英語名 Kurdistan Regional Government の略。クルド語では、Serokayetiya または Hikûmeta(政府) Herêma(地域) Kurdistanê。日本含む海外メディアではが使われる。参照：クルディスタン地域政府大統領府公式サイト

ロジャバ（西クルディスタン、北シリア）

Rojava Kurdistanê

トルコの勢力排除に向けた動き

▸クルドとアサド政権の合作を恐れるトルコ

先月末、北シリア連邦の代表団がダマスカスを訪問し、アサド政権との交渉の準備を始めたことに狼狽した、トルコと KDP の代表団もまた同地を極秘に訪問したとの噂が流れた。在イギリスのモーニングスター紙もこの噂について報じ、代表団はヘウレルにシリアの領事館を設置する代わりに北シリア連邦との交渉を破棄して欲しいと申し出たという[2 日、モーニングスター紙]。

▸イドリブ解放

シリア・アラブ共和国大統領バッシャール・アサドは 1 日、ダマスカス近郊のシリア・アラブ軍（以下シリア軍）部隊を訪問し、シリア内戦の勝利は近いと将兵たちの士気を鼓舞した[1 日、アラブソース]。いよいよイドリブ解放へ本腰を入れ始めた。アサド政権寄りのメディアの取材によると、シリア軍はハマ方面のテロリスト掃討が完了したらイドリブ攻勢を開始する意向だという[12 日、アラブソース]。政府寄り地元紙は、イドリブ県境にシリア軍の大部隊が集結中と報じた[12 日、「祖国」紙]。これに対峙する反体制派テロ組織の連合軍「国民解放戦線」は、抵抗の準備はできているとしている[27 日、「郷里」]。

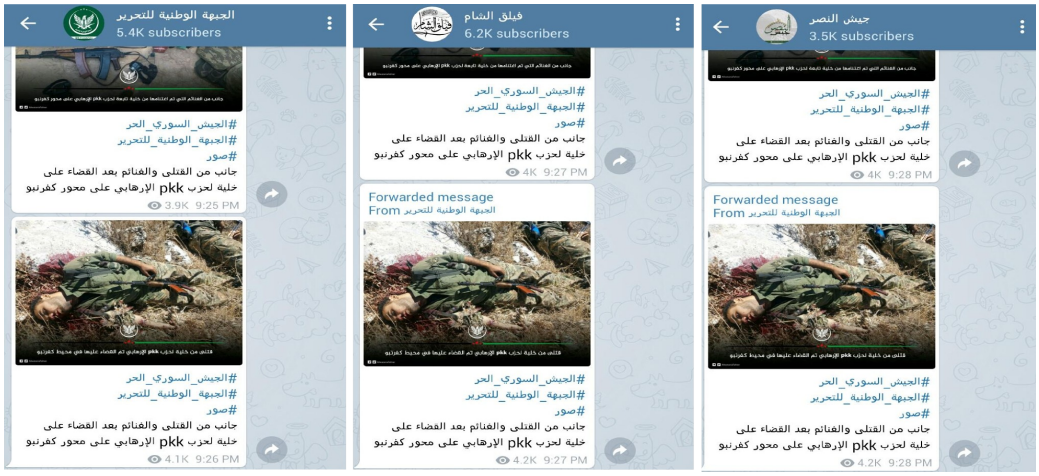
アサドはこれまで「和解」によって各地から追放されたテロリストをイドリブへ集めてきた。ロシア中心のアスタナ協議によって、イドリブは停戦地域の筆頭となりトルコ軍部隊の入域が事実上認められた。エルドアンはイドリブがアサドの攻撃を免れる中立地帯の状態を永続化できると考えたことだろう。アサドはイドリブのトルコ占領を認める気はなく、包囲攻撃をすることを目指していた。またロシアも最終的にトルコの利益よりもシリアの領土恢復を優先することになった。トルコはこのタイミングで、シリア内戦以来支援してきたヌスラ戦線（現：シリア解放機構）をテロ組織に指定した[31 日、スマートニュース]。

▸アフリンでのゲリラ活動は活発

ゲリラ部隊「オリーブの怒り作戦室」始めクルド勢力が、トルコ軍傘下のテロリストの暗殺を繰り返している。21 日には、アフリン市中心部でまたもや爆弾テロが発生した[22 日、ユーフラテスニュース]。その後、「殉死者ロハット部隊」と名乗る犯行声明がネット上に投稿された[23 日、ユーフラテスニュース]。

また、クルド側の情報によるとテロリストだけでなく越境するトルコ兵も犠牲になっている。YPG 広報は 31 日、ラジョ（トルコ国境に近い山岳地帯の村）近郊でトルコ兵 2 名を殺害したと発表した[31 日、ユーフラテスニュース]。

一方でトルコ側からクルド人ゲリラの掃討に成功したという情報発信は少ない。「オリーブの怒り作戦室」が執拗に狙うシャーム軍団は 9 日、「PKK」の掃討に成功したと発表した。「国民解放戦線」に参加する他の反体制派勢力も同様の投稿を行った。



事実上イドリブ各地で作戦行動を行うクルド人部隊が、正式にイドリブ解放作戦に参加するかということが焦点になっている。

‣北シリアの飛行禁止区域構想

アメリカが北シリアに高性能レーダーの設置を始めていることが、KRG の KDP 寄りメディアによる有志連合軍司令部への取材で明らかになった[25 日、バスニュース]。その目的は、湾岸戦争時イラクのクルディスタン地域上空に設定された飛行禁止区域の再現である。現地のアメリカ軍将校が明かしたところによると、場所はハサカ南部のシャダディである。この町はデリゾールに近く、同地ではアサド政権側とクルド側が別々に IS 掃討作戦を行っている。双方の偶発的な衝突や「誤爆」も繰り返し報じられており、双方緊張感を持ち睨みあっている状況だ。まずはシリア空軍による空爆の脅威があるデリゾールで飛行禁止区域の設定を確実にし、その後北シリア全体へ広げていこうという算段だと見られる。クルド側には、トルコ軍機の飛行もアメリカのお墨付きによって排除する狙いがあると見られる。

当協会は北シリア連邦当局幹部に、北シリア自治の合法化に向けた今後の見通しはいかなるものか電話取材を行った。それによると、イラクのクルディスタン地域のように半独立状態ではなく、ダマスカス政府と協調した自治状態になっていくことが見込まれるそうである。クルド人部隊については既に過去の本報告書で分析したように、「祖国防衛隊」のような準軍事組織として合法化を認めさせる見通しだという。

‣マンビジュ

トルコ軍と傘下のテロ組織は、「警備活動」と称する示威行動を継続している。トルコ軍は 1 日、23 回目のマンビジュ郊外の警備活動が終了したと発表した[1 日、アナドル通信]。その発表の中でトルコ軍は、

アメリカとトルコは別々に共同警備活動を行っていくと述べた。また、「非 PKK 化」についても進めていくことも強調した。21 日には、33 回目のトルコ側「単独」の警備活動を行ったと発表した[21 日、アナドル通信]。

トルコの脅威に曝される中、マンビジュ市民は IS からの解放 2 周年を祝った[13 日、ユーフラテスニュース]。マンビジュは 2 年前の 8 月 12 日にクルド勢力によって IS から解放された。戦闘終了から 2 年経過した今でもまだ市内には破壊された建物が残る。

▸トルコリラ下落のあおりを受ける反体制派

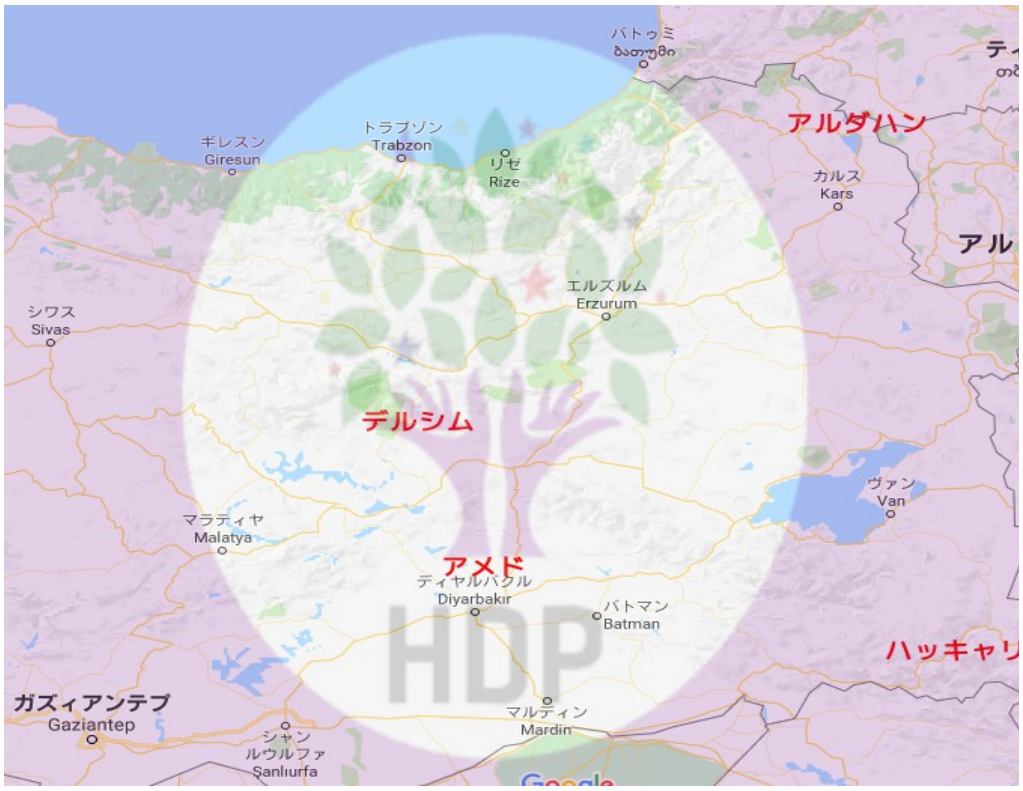
英字の中東専門サイトは、止まらないトルコリラの下落が反体制派支配地の経済に大きな打撃を与えていると報道した[28 日、アルモニター]。同サイトの取材チームは実際に反体制派支配下のアルバーブを訪問したところ、犠牲祭間近だというのに市場には冷やかし客ばかりだったという。反体制派関係者への取材によると、流通もストップしているとのことである。深刻なのはトルコの傀儡政府職員の実質的減給である。本記事内の傀儡政府職員へのインタビューによると、リラが上昇に転じなければもはや生活を維持することはできないという。

トルコ軍占領下アルバーブの傀儡政庁 出典：ロイター

トルコのシリア侵略の目的は、イデオロギー的にはオスマン帝国の後継国家としてかつての領土を恢復することにあるが、実際は中東にトルコ製品のはけ口並びにリラ経済圏となる植民地を形成することにある。クルド人勢力がコバニ防衛戦に勝利しアメリカを味方につけたこと、アサド政権が勢力を盛り返したことによってエルドアンの野望は既に行き詰っている。過去本報告書で指摘したように、シリアポンドはトルコリラに対し価値を維持している。反体制派支配下の住民は、経済的理由でアサド政権またはクルド人勢力の到来を望む機運ができている。ここに来て通貨までもがトルコ勢力の排除を助けているのである。

北クルディスタン（トルコ領南東部）

Bakurê Kurdistanê



アメリカとの緊張

‣ほど遠い緊張緩和への道

1 日、アメリカ国務長官マイク・ポンペオとトルコ外相チャブシオールは電話会談を行った[1 日、「自由」紙]。議題は勿論トルコで拘束されているアメリカ人牧師ブランソン氏に関する問題である。結局チャブシオールがエルドアンの「強い決意」をポンペオに伝えて終わったようである。17 日、トランプは改めてブランソン氏を解放しなければ新たな制裁を科すことを宣言した[17 日、AFP]。

エルドアンの外交的失策とトランプの強硬姿勢に対して、外野は好戦的主張を繰り広げている。国粋主義野党のいい党は、制裁への報復としてイスタンブールにあるトランプタワーを接収することを提案した[2 日、「自由」紙]。政権与党公正発展（AKP）と連立を組むトルコ人種至上主義政党民族主義行動党（MHP）議員は、iPhone を破壊するパフォーマンスを行った[15 日、CNN トルコ]。アメリカ人の怒りを招きそうな過激な発言もあった。政権寄りのコラムニストが、新聞のコラムで新たな9・11の発生について触れたのである[15 日、トルコ詳報]。

▸リラ下落

ブランソン氏の解放を迫るアメリカが発動した制裁により、先月に引き続きリラの下落が続く。アメリカがブランソン氏の解放に向けた、トルコ側の取り組みへ期待を示したことから、一時下げ止まりが見られた。何も実行されないことが明確になるとまた下落に転じた[8 日、情況]。

トルコでは、愛国心に訴えた掛け声で、リラ下落を乗り切ろうとする機運にあふれている。エルドアンは、ドルや金をリラに替えるよう訴えた[11 日、ロイター]。トルコの有名なポップスターは、リラ下落でトルコが飢えに陥ることはないと発言した[11 日、「自由」紙]。

リラ危機を打開すべく、エルドアンの娘婿である財務相アルバイラクは、「新経済体制」なるものをぶち上げた[10 日、「自由」紙]。アルバイラクはその骨子を「果断な取り組み」と表現した。つまるところ中央銀行の独立性や国際的信用を無視して、エルドアンの意志を推し進めるという内容しかない。勿論中央銀行の独立性や利害関係者への配慮は欠かさないと強調はしたが、エルドアンの身内が言っても信用されることはないだろう。

カタールは、経済危機に喘ぐトルコに対して 1.6 兆円規模の直接投資を実施すると約束した[15 日、「自由」紙]。アメリカ大統領補佐官ボルトンは、この直接投資の約束を「焼け石に水」だとし、アメリカとの関係正常化以外にトルコ経済を救う道はないことを強調した[22 日、トルコ詳報]。

クルド人への弾圧

▸「土曜日の母」を排除

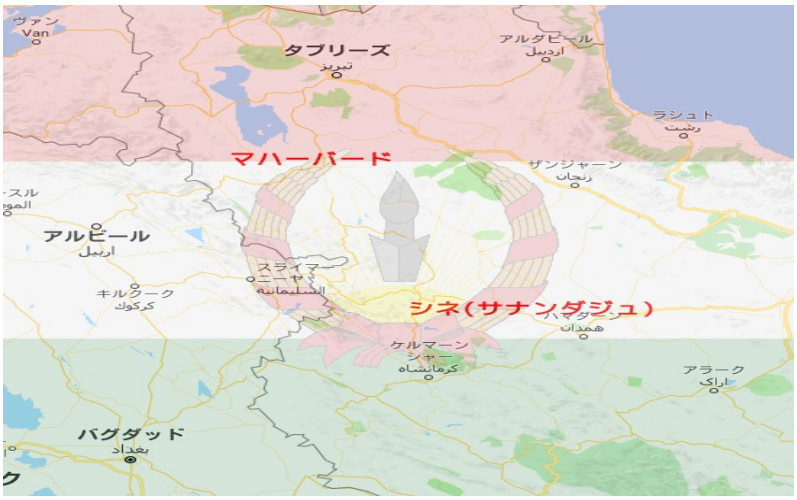
土曜日の母とは、トルコ政府と PKK の闘争の中で、情報機関とその手先によって失踪した子供を持つ母親たちによる集会である。700 回目を迎える集会において突如警官が介入し、強制解散させられる事態になった[27 日、「自由」紙]。内相ソイルは、同集会を「テロ組織に利用されていた」と強制解散措置を正当化した。

▸PKK の動向

トルコ軍、PKK 双方の小規模な戦果発表の応酬以外に動きは見られない。例としてトルコ軍は 3 日、イラク国境に近いジョレメルガ（ハッキャリ県）で PKK 戦闘員 2 名を「無力化」したと発表した[3 日、TRT ニュース]。PKK は、前述のジョレメルガでトルコ軍の隠蔽された陣地を発見し奇襲したと発表した[28 日、ハワルニュース]。

東クルディスタン(イラン領西部)

Rojihilata Kurdistanê



統一戦線

PKK 系武装勢力クルディスタン自由生命党(PJAK[6])は、党派を超えた共同戦線の形成を呼びかけた[12 日、ルダウ]。トルコがイランに持ちかけた、国境地帯でのクルド人反政府勢力の掃討に関する協力関係に対抗するものである。一方で長期的な視点も見られる。イラン政府は昨年から打ち続くデモ、制裁再開による経済危機への無為無策、また追い打ちをかけるような水不足により、次の革命は近いのではないという観測が増えている。イランでの政治的混乱が増す事態になった時、PKK 系列の勢力が他のクルド勢力を指導するという、北シリアのようなシステムの樹立を目指しているともとれる。PKK の主要対立相手といえば勿論、KDP 系列の勢力である。伝統的なイラン・クルディスタン民主党(PDKI)は、マハーバード共和国の大統領カジ家に明白なように、クルド人有力者の勢力である。これに対し PJAK は PKK の流れを汲むことから、貧農や低賃金労働者をリクルートしている。

ラミン・ホセインの運命

イラン当局に拘束され死刑判決を下された、クルド人青年ラミン・ホセイン・パナヒの助命闘争が続いている。政権側も何としても死刑を執行しようと躍起になっている。彼の担当弁護士が、シネ(サナンダジュ)でイラン当局に拘束されたとの情報が飛び交った[5 日、ユーフラテスニュース]。ラミン本人は助命の望みが薄い中、ハンガーストライキ実行していると人権団体が伝えた[27 日、NRT テレビ]。

文責:一般社団法人日本クルド友好協会研究員　並木宜史

6　クルド語の名称 Partiya(党) Jiyana(生命、生活) Azad(自由) a Kurdistan の略。